

CEFR-CV以降の日本語教育を考える

講演1: 「日本語教育の参照枠」とCEFR— ドイツの移民統合政策から考える



真嶋 潤子

国際交流基金関西国際センター 所長・大阪大学 名誉教授

講演2: イタリアの複言語主義から見る日本語教育



西島 順子

大分大学 国際教育研究推進機構 国際教育推進センター 講師



全 体 討 論



←参加申込みは
こちらから
(2/12〆切)

日時:2024年2月14日(水)

午後1時30分から午後5時
(受付 1時10分~)

場所:大阪大学吹田キャンパス
コンベンションセンター会議室1

大阪大学国際教育交流センター

CIEE Center for
International
Education and
Exchange

<https://ciee.osaka-u.ac.jp/>

第 16 回大阪大学専門日本語教育研究協議会

CEFR-CV 以降の日本語教育を考える

日時：2024 年 2 月 14 日（水）13：30～17：00（受付 13:10）

場所：大阪大学吹田キャンパス コンベンションセンター会議室 1

主催：大阪大学国際教育交流センター

----- プログラム -----

総合司会 国際教育交流センター 准教授 中俣 尚己

13：30～13：35 開会の挨拶 国際教育交流センター センター長 有川 友子

13：35～13：45 趣旨説明 国際教育交流センター 特任講師 藤原 京佳

13：45～14：45 講演 1：「日本語教育の参照枠」と CEFR—ドイツの移民統合政策から考える

国際交流基金関西国際センター 所長
大阪大学 名誉教授 真嶋 潤子

14：45～15：45 講演 2：イタリアの複言語主義から見る日本語教育

大分大学 国際教育研究推進機構 国際教育推進センター 講師 西島 順子

15：45～16：05 休憩

16：05～16：55 全体討論

全体討論司会 国際教育交流センター 准教授 大谷 晋也

国際交流基金関西国際センター 所長
大阪大学 名誉教授 真嶋 潤子

大分大学 国際教育研究推進機構 国際教育推進センター 講師
西島 順子

16：55～17：00 閉会の挨拶 国際教育交流センター 教授 村岡 貴子

第 16 回大阪大学専門日本語教育研究協議会

CEFR-CV 以降の日本語教育を考える

主催 大阪大学国際教育交流センター

背景および趣旨

令和 3 年 10 月に文化審議会国語分科会によって「日本語教育の参照枠」が取りまとめられました。「ヨーロッパ言語共通参照枠」(以下、CEFR)を参考にして作られた、この参照枠は、学習、教授、評価にかかる日本語教育の包括的な枠組みであるという点で画期的なものであると言えるでしょう。昨今コロナ禍も落ち着きを見せ、2023 年 6 月末時点の在留外国人数は 322 万 3858 人と過去最高を記録しました。在留資格別では「技能実習」が「永住者」に次いで多く、「留学」を上回っています。日本語教育の参照枠でも「生活」「就労」「留学」という三つの活動領域が設けられており、日本語教育を必要とする人々の目的が多様化していることがわかります。

「日本語教育の参照枠」の概要(文化庁)によると、国内外共通の指標・包括的な枠組みが示されたことにより期待される効果として、国や教育機関を移動しても継続して適切な日本語教育を受けることができること、生活者・就労者・留学生等に対する具体的かつ効果的な教育・評価が可能になること、試験間の通用性が高まること、試験の質の向上が図られることが挙げられています。そして、以上より「国内外における日本語教育の質の向上を通して、共生社会の実現に寄与する」ものとされています。

今回の専門日本語教育研究協議会では、「日本語教育の参照枠」のもととなった CEFR および、2018 年に公開された CEFR-CV の理念を理解した上で、今後さらに在留外国人数の増加が予想され、多文化、多言語社会へと進んでいく日本社会において、どのような日本語教育が必要とされるのか、さまざまな視点から考えていきたいと思えます。

ご講演者として国際交流基金関西国際センター所長および大阪大学名誉教授の真嶋潤子先生、大分大学国際教育研究推進機構、国際教育推進センター講師の西島順子先生のお二人をお迎えします。文化審議会国語分科会のメンバーでもある真嶋潤子先生には、日本語教育の参照枠と CEFR の理念を、ドイツの移民統合言語政策の事例とともにお話しいたします。日本語教育に携わる一方イタリアの複言語教育に関するご研究をなさっている西島順子先生には、イタリアにおける CEFR の影響と日本語教育への示唆についてご講演いただきます。お二人のお話をもとに、参加者の皆さまとの活発な意見交換を通して、今後の日本語教育のあり方について議論できればと思えます。